

このようにこの中央会場に集まって、また丘の上会堂、庄和会堂に集まって、皆一緒ではありませんが、時を同じくして三つの会堂に集まったの合同礼拝をささげることができますことを感謝いたします。そして、今日もなお家に留まって、家からオンラインで礼拝を共に捧げている方たちがあることを覚えています。一つの所にみんなが集まる、大人数で集まるのが困難になり、1年が経ちました。その中、お互いにマスクをしたり、今私はマスクを外しましたけれども、ここにはボードがあって、そのような、飛沫を飛ばさないことを気をつけながら普段生活をしています。そういう、コロナで過ぎていった1年間だったように思いますが、2020年度が終わろうとしています。そして、同時に受難週が近づいています。イエス様が十字架の道を歩まれた、そのことを覚えて過ごします。今日の午後には教会の年次総会もあります。一年のまとめの日でもあるということです。

今日は先週の庄和、また中央の礼拝で開かれた、マルコの福音書10章35から45節の御言葉のところの、最後の45節、そして、次の段落46節から52節までのところを朗読していただきました。今日は、この一人の目の見えない人とのイエス様との出会いと対話について、また、その前の「仕えるしもべとなる」と言う御言葉について、そして、総会において年間聖句として掲げようとしています、第一ヨハネの御言葉について、この3つの御言葉から説教させていただきますと願っております。

I. 「私をあわれんでください」

まず、46節からのところを見ていきましょう。「さて、一行はエリコに着いた」とあります。ガリラヤを後にして地上の最後の旅をしてきました。南に向かい、エルサレムに向かう旅です。エリコまで来たら、もうエルサレムはもうすぐです。イエス様の死に場所であるエルサレムが近づいています。このマルコの福音書では、そこで一人の目の見えない物乞いがいて、イエス様のことを聞いて、イエス様と出会ったということが記されています。彼の言葉を見てみましょう。47節です。彼は叫びます。「私をあわれんでください。ダビデの子よ。イエスよ。私をあわれんでください。」という叫びです。この「私をあわれんでください」というのは、ギリシャ語の聖書では「エレエソン・メ」という言葉です。ここでは、「ダビデの子」そして「イエス様」と呼びかけていますが、「主よ」、「主よ、私をあわれんでください」のように「主よ」という時は「キューリエ エレエソン・メ」って言うんですね。いわゆるそれを「キリエ エレイソン」という言葉、「主よ、あわれんでください」という言葉として、賛美として歌われたり、繰り返し唱えられたり、祈りの言葉としてきた言葉でもあります。

「キリエ エレイソン」。「主よ、あわれんでください」。この目の見えない人は、イエス様がそこに来ておられると聞いて叫びました。「主よ、私をあわれんでください」。

皆さんはこの叫びを自分の叫びとして叫んだことがあるでしょうか。そのことを、今日は一緒に礼拝をしている中高生にも、また、大人の皆さんにも尋ねてみたいと思います。中高生や青年の皆さん、「私をあわれんでください」と心から神様に叫んだことがあるでしょうか。大人の皆さんはどうでしょうか。どんな時に「主よ、私をあわれんでください」と叫んだでしょうか。きっとあったと思います。人生の中で、「主よ、私を助けてください」「今この状態に置かれている私をあわれんでください」という時が、きっとあったのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。もしかしたら、若い人たちの中には、そんなことはなかった、まだない、という人がいるかもしれません。でも、もし無いならば、これからきっとそう叫ぶ時があるだろうと思います。人生を歩いていく中で、何かの壁にぶつかって自分ではどうしようもないところにぶつかって、「主よ、私をあわれんでください」と叫ぶ時は、必ずあるだろうと思います。今日イエス様と出会ったこの聖書に中に出てくる人は、目の見えない人でした。そして、物乞いであった、道端に座っていた。ティマイの子バルティマイという人だったと書かれています。この人が、イエス様が近くに來たことを知って叫びました。「私をあわれんでください」。

この一年振り返りますと、新型コロナウイルスの感染症が広がってゆき、コロナの中で何度こういう思いになったかshれないと思います。1年前を思うと、得体の知れないものへの恐れがありました。経験したことのない状況になりました。学校が突然、全国で一斉に止まってしまう、電車に乗ることも、道を歩くことも、していいのかいけないのかよくわからない、自分の行動を周りからどう見られるか心配する、経験したことのない状況がありました。そういう中で、判断を誤ったら一体どうなってしまうだろうかと悩むことが、私にもありました。皆さんもあったと思います。そういう中で「主よ、あわれんでください。そしてみんなを守ってください」、心の中でそう叫んでいたと思います。

Ⅱ. イエス様のもとに一緒に行きましょう

叫ぶこの盲人に対して、周りの人は黙らせようとたしなめます。しかし、彼は黙ることができません。「ますます叫んだ」。「ダビデの子よ。私をあわれんでください」。そうしたら、イエス様はどうされたでしょうか。イエス様は立ち止まりました。通り過ぎてしまわれなかったのです。止まってくださった。そしてこう言われます。「あの人を呼んできなさい」。イエス様は「あわれみたまえ」と叫ぶ者のことを、「わたしのところに連れて来なさい」と言ってください、「あの人を呼んできなさい」と言ってください。 私たちも、自分が自らが、「主よ、あわれんでください」と叫ぶとき、イエス様が「わたしのところに呼んできなさい。わたしのところに連れてきなさい」そう言ってください。「私も、主イエス様に呼ばれているのだ」そう思うことができます。そういう経験があるでしょうか。

そしてもしそうならば、今度は私たちに、ほかの誰かのことを、「あの人を連れて来なさい」とイエス様がおっしゃいます。誰かを主のもとに連れて行くという役目を、私たちに与えようとしてくださるのです。「あの人を呼んできなさい」「わたしのところに連れてきなさい」

と言うのです。皆さんにも、イエス様のところに連れて行きたい人、連れていかなきゃなと思う人、誰か思い浮かぶ人がいるでしょうか。私たちが誰かに向かって言うのです。「主があなたを呼んでおられます。心配しないで、さあ立ってください。主イエス様のもとに行きましょう」と。

前には誰かが言ってくれた。今度は私たちが誰かのために言うのです。かつて、誰かがみなさんの事を、皆さん一人一人のことを、あなたのことを、イエス様の所に連れて行ってくださったということあったでしょうか。イエス様に近づけてくれた人、「イエス様のところに一緒に行きましょう。イエス様があなたを呼んでますよ」と言って招いてくれ、促してくれた人、手を取って背中を押してくれた人がいたでしょうか。思い起こしてみましよう。そして、今度は私たちもまた、誰かのために「心配しないでよい。さあ立ちなさい。あなたを呼んでおられます。」と言って誰かをみもとに連れていく役目を担うのです。

この人は、50節で上着を脱ぎ捨てます。そして、「躍り上がってイエスのところに来た」と書いてあります。目の見えなかった人、「私を助けてください。あわれんでください」と叫び続けた人は、今イエス様の前に躍り上がってやってきました。私たちも一人一人、それぞれの自分の時にイエス様のところに来るという経験をします。その経験をする必要があります。その経験をすることができます。今日も私たち一人一人、この礼拝の場に来ています。招かれています。イエス様の前に今出しています。中央会堂にいても、丘の上会堂にいても、庄和会堂にいても、それぞれの家庭にいたとしても、今私たちは一人一人、主の前に来ています。「躍り上がってイエスのところに来た」というこの人のように、心を上に向けて、心の目を上げてイエス様のもとに今来る。この礼拝の場、この時間を、そういう場としたいと思います。「さあ、イエス様のところに来なさい。イエス様があなたを呼んでいますよ。」と私たちは礼拝にこうやって集っているお互いがお互いに向かって呼びかけたいと思います。

Ⅲ. 「何をしてほしいのか」

さて、この人はイエス様の前に来ました。ここからイエス様との対話が始まっていきます。イエス様が尋ねます。「何をしてほしいのか」。この前のヤコブとヨハネにも同じお尋ねがありました。この盲人にも尋ねられます。「何をしてほしいのか」。私たちもそれぞれ、今イエス様のもとに招かれて、イエス様の前に座っている者として、主との対話をさせていただきます。私たちのことも、主は呼び寄せ、私たちにも問いかけておられます。「あなたはわたしに何をしてほしいのか。わたしが何をすることをあなたは望んでいるか」主が尋ねておられます。私たちも答えることができます。この人が率直に心の願い・心の底からの願いを叫んだように。「先生、目が見えるようにしてください」と、大声だったか小声だったかそれは分かりません。ただ率直な、心からの叫びです。スマートフォンのアプリで「聴く聖書」という無料でダウンロードできて、聖書が読めて、音も聞こえるっていうのがあるんですけど、その「聴く聖書」で聞くとは、そのアプリでは結構大声でした。思い切って声を出している感じでした。皆さんが聖書を朗読するとしたら、どう読むでしょう。それはちょっとドラマ朗読

的に読んで「聴く聖書」なんですよね。「先生、目が見えるようにしてください」。彼は自分の一番の願いを、イエス様に率直に正直にそのまま話しました。「あなたは何をしてほしいのか」。私も皆さんも、イエス様に尋ねられています。答えてみましょう。一人一人が、そして、私たちのこの群れが、この教会が、一つとなって「イエス様、これです。私たちが願うのは」と答えることができるようになったらと思います。

今一つの問いを思い出しています。ピーター・ドラッカーという人の『非営利組織の経営』という本に出てくるひとつの問いです。このドラッカーは、経営学とかマネジメントの本をたくさん書いた先生ですが、ドラッカー少年が中学生の頃に、学校の先生の一人フリーグラー牧師がクラスの皆にこう尋ねたそうです。「あなたは何によって憶えられたいかね？」どんな人として記憶されたいか？という問いでした。「どんな人間になりたいか」「どんな人間として死にたいか」という問いです。何十年も経って、同級生たちが集まったそうです。あの先生の質問の話になりました。皆がその問いを覚えていたということです。あの時は誰も答えられなかった。10代の彼らは誰も答えられなかったのです。中学生だったあの時、フリーグラー牧師は言いました。「今は答えられなくても良い。でも、50歳になっても答えられなかったら、人生を無駄にしたことになるよ」と。クラスみんなの心にその問いは残っていたそうです。私は40代の頃にその本を読んでですね、「50歳になるまでに答えられるようにならなきゃ」って思ったことを思い出します。そのクラスみんなは、人生の途上で何度も自分に問いかけたのでしょ。う。「お前は何かによって憶えられる人間になりたいのか？」とドラッカーは言います。「若い時にそのような問いを投げかける人と出会える人が幸せだ」と。

時々ですね、3月が多いんですけども、この教会の中高生たちに問いかけてきました。「あなたは何によって憶えられたいですか」と。「何によって記憶される人間になりたいですか」と。今日はもう一度、中高生たちに問いかけたいと思います。顔が見えるところにあまりいませんですけど、オンラインの向こうにいると信じて。中高生の皆さん、何によって憶えられたいですか。そして、青年の皆さん、また大人の皆さんも、50歳を前にした人たち、また、すでに50歳過ぎた人たちにも問いかけてみたいと思います。あなたは何によって憶えられたいですか？「この人はこういう人だった」と世を去る時にどう言われたいですか？どう記憶されたいですか？尋ねてみたいと思います。もちろん世を去る前に、死ぬ前でも良いのです。皆さんも考えてみてください。そして、それぞれ答えてみていただきたいと思います。何を願って人生を前進しようとしているのでしょうか。どういう人間になりたいか、どこを目指しているかということです。

私は先週の礼拝で話したように『「愛だよ、愛。一番大事なのはそれだよ」と言っている本人が一番愛だよ」』と言われる人間になりたいと思いました。でも、遠いです。こないだも言いましたように。一番でなくてもいい。ちょっとでもいいでしょう。「あの人ちょっと愛だよ」でもいいでしょう。そんなこと、思います。皆さんはどうですか。どうでしょうか。あなたは何によって憶えられたいでしょう。また、個人個人に対する問いであるとともに、この教会に対して、この私たちの群れ、イエス・キリストを信じる信仰によって結ばれている信

仰共同体としての私たちの群れとしては、何によって憶えられたいでしょう。どういう教会になりたいのでしょうか。また、教会としてはどういう人を育てていきたいのでしょうか。

IV. 奉仕して導くリーダー

今日の説教題は「サーバント・リーダーへの道」としました。先週の中央の礼拝で、今日の箇所の前のところですね、43節44節「仕える者になれ」「しもべになれ」というイエス様の御言葉を聞きました。「先頭に立つなら、皆のしもべになれ。」「先に立つ人、リードする人は、皆のしもべ、皆に仕える者になれ」というイエス様の御言葉を聞いたのです。「リードする人はサーブする者になれ」ということです。「リードするためには、サーブせよ。導くためには、仕えよ」というのです。仕える人=サーバント、導く人=リーダー、これら二つの言葉を組み合わせて【サーバント・リーダー】とか【サーバント・リーダーシップ】という言葉があります。ロバート・グリーンリーフという人が書いた分厚い緑の本『サーバント・リーダーシップ』という本があります。ある時期、数年前ですけど、一生懸命その分厚い本を読みました。同じグリーンリーフさんが書いたもう少し薄い本『サーバントであれ』という本～『奉仕して導くリーダーの生き方』～という本もあります。その本の帯にはですね、こういう風に書いてあります。『引っ張るのではなく支える。このシンプルなアイデアによってリーダーシップの意味合いは根本的に変わった』という、一つのリーダーシップのスタイルの提言がそこにあるということですね。帯の裏には書いてありますが、これは元々の分厚い本の方に出てくる言葉なんですけれども、こう書いてあります。さすがに帯の言葉はよくまとまってるなと思うんですけど、こう書いてあります。『サーバント・リーダーは、第一にサーバント=奉仕者である。はじめに奉仕したいという気持ちが自然に沸き起こる。ついで意識的に行う選択によって、導きたいと強く望むようになる。しっかり奉仕できているかを判断するには、次のように問うのが最も良い。奉仕を受ける人たちが人として成長しているか、奉仕を受けている間により健康に、聡明に、自由に、自主的になっているか？自らのサーバントになる可能性が高まっているか？』そのように書かれています。奉仕して奉仕するサーバントとなるということは、その報酬を受ける人が人間として成長できる、より健康になる、より自由になり、より賢くなり、より主体的になる、そして、その人自身もサーバントになっていく、支えていく可能性が高まっているかどうか、それがサーバントとしての奉仕の質であると言われていています。そして、更にちょっと本の中から言いますとですね、『その準備は遅くとも高校生の段階で始めるべきだ』って言うのです。『サーバントになるには、とりわけ「サーバントリーダーという努力なしには果たせない役目」を担うためには、遅くとも高校生の段階で、できればもっと早くに準備を始めるべきだ』と言うのです。なぜなら、サーバントは「権力と競争」という二つの特有の行動パターン・思考パターンに立ち向かえるようになる必要があるからだと言います。「権力」については、例えば「権限を行使する役割を一人では引き受けないようにする」、つまり「誰かと一緒に担うようにすること」とか、「競争」については、「競争ではなく協力の関係を目指す」とかということが書かれています。「サーバントとしてリードする人

は、前に出て自ら手本になって手本となって示す」ともあります。この本の中に出てくること
が、成人になるまでにサーバントになろうとする意志を失わない人たちのことが繰り返し出て
きます。二十歳になるまでに、大人になるまでに、サーバントになろうとする意志を失わな
い、可能性を失わない人たちの中から、できるだけ多くのサーバントを送り出すということだ
すね。

そして、若者を導くメンターについても書いてある。つまり、年上の人たちのことですね。
「若者を導くメンターになろうという才能と意志と勇気を持つ人にとっては、この本には得る
ところがあるはずだ」と記して、「若者がサーバントになるのを手伝う以上に、年配者に満足
をもたらすものがあるだろうか、そうしたメンターにとっては心に受ける報酬が極めて大き
くなると私は思っている」と言うのです。若者がサーバントになるのを手伝うというのは、ま
さに若者がイエス様の道を歩むのを手伝うということです。どうしたらできるでしょうか。簡単
ではないでしょう。しかし、「できるし、私たちはその方法を知っている」とグリーンリーフ
さんは書いています。それは「心に受ける報酬があることなのだ」と言うのです。お金とか名
誉の報酬ではない。年配者には若者がサーバントになるのを手伝うならば、心に報いがある
というのです。ですから、年配者の先輩の皆さんには呼びかけたいと思います。若者に支えて仕
えてほしい。若者が自立してサーバントとなって、イエス様の道を歩むのを助けてほしい、助
けていただきたいと、呼びかけお願いしたいと思います。サブしてリードする人が、サブ
してリードする人を生み出していきます。そして、教会からそういう人たちを送り出してい
く。社会のあらゆる分野に送り出していく、それが、私たちがしたいと願うことです。

V. 愛されている者として愛する

2021年度の年間聖句の候補として、総会資料の牧会方針に第一ヨハネ4章19節の御言葉を
掲げさせていただきました。ちょっとこの御言葉を開いてお読みしたいと思います。すでに1
月から使っていただいている教会のカレンダーの御言葉として、1年間その言葉が掲げられて
います。

『私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。』

最初に神様の愛があります。最初に神の愛が私たちに注がれています。私たちはそれを受け
ます。その愛をいただいて満たされます。そして、そこでとどまらずに、今度は私たちが行動
するのです。何かをするのです。私たちはします。神が最初にしてくださったからです。私た
ちは愛します。神がまず愛してくださったからです。愛されている者として愛します。支えら
れた者として仕えます。ですから、子どもたちには、若者たちには、大人の私たちが仕える者
でありたいと思います。愛されて支えられて育った子どもたち、若者たちが、愛された者とし
て、仕えられた者として仕える者となる、愛する者となることができるように助けたいと思
うのです。そして、私たちはお互いに、自分も支えられている者として、誰かに支えられてい
る者として、誰かを支えます。相互に、同時にするわけです。そして、神に慰められている人間
として、あらゆる状況の中にいる人たちを慰めることができるようになっていきます。私たち

は愛します。どのようにして愛したらよいか、どのようにして仕えたらよいか、ぜひ一人一人が「私がしたいことはこれです」「望むことはこれです」とイエス様に答えられるように、何か一つでも見つけていきたいと思えます。

総会資料の「牧会方針」の中にも書いたのですけれども、まず、自分と同世代の人に対して何ができるでしょうか。また、自分より若い人に対して皆さんにできることは何でしょうか。そして、年長の人に対して何ができるでしょうか。それぞれ何か一つでもできることを見つけましょう。探しましょう。たたきましょう。たたいて、探して、見つけることができれば、それを実行していきましょう。神の愛がまず注がれていると信じる者として、愛する者に、仕える者に、ならせていただきます。

最初に歌った讃美は新聖歌 114 番「血潮したたる」という十字架のイエス様のお姿を歌った歌でした。「血潮したたる 主のみかしら とげに刺されし 主のみかしら」。そしてこう歌います。「悩みと恥に やつれし主を 我はかしこみ 君と仰ぐ」。悩みにやつれた人、恥にやつれ、疲れきって、弱り切った人を仰ぎ見るでしょうか。見上げて捧むでしょうか。私たちの王、私たちの主は「悩みにやつれた方、恥にやつれた方」です。「悲しみの人で、病を知っている方」です。周りの人からは、「自分の罪のゆえに裁かれて殺されたんだろう」と思われていましたが、実は自分ではなく、他の人の罪のために死んだ方です。そのような、見るべきところのない人と見えたお方を、私たちは仰ぎます。十字架の主、低くなられた傷ついたイエス様の姿を仰ぎ見ます。そして、主のように生きたいと願います。今日最後に歌う讃美は「主のように 主のように」と歌う讃美です。立派な尊敬された人としての主イエスだけではなく、見下され、たたかれ、低くされた方としてのイエス様を見て、そのように生きたいと願う。高いところに上りつめたい、高い所に行きたい、高い地位に就きたいと願ってイエス様についていくのではなくて、低いところに下ろうとして、イエス様について行く。イエス様がしもべ = ドウ・ロス すなわち「奴隷」となったように私たちもしもべになり、イエス様が仕える人となったように仕える人となる、それを願って進みます。

愛されたから愛する。仕えてもらったことがあるから自分も仕える人になる。それが私たちが目指したい道です。そして、私たちが私たちの中の若い世代を、そういう生き方へと導きたい、育てていきたいと願う生き方です。サーバントになろうとする志を二十歳まで失わないでいる人たちを大切にしましょう。一人でも多く育てましょう。教会から日本の社会へ送り出しましょう。あらゆる職場に、あらゆる学校に、あらゆる地域コミュニティに、グループに、そういう人が必要です。キリストのように生きようとする、サーバントとなろうとする人を送り出しましょう。そして、サーバント・リーダーとなる人、仕えて前に出て道を示す人を送り出していきましょう。教会が神の言葉と神から受けた愛によって子どもたちや若い人たちを育て、この世に送り出していく。小さくても、地味でも、一つずつでも、それをし続けましょう。

VI. さあ 行きなさい

マルコの10章に戻りたいと思います。最後の所。彼は見えるようになりました。イエス様が言われます。「さあ行きなさい。あなたの信仰があなたを救いました」。「あなたの信仰があなたを救った」とイエス様は私たちにもそう言ってくださいます。すでに神の子とされた者として、今はまだこの世にある間は不完全ですが、完全に向かって進んでいけます。神を知り、キリストを知る者とされました。それが永遠の命です。まことの命です。霊の命です。かつて霊的に死んでいたのに、今、生きているのです。だから、私たちも道を進むイエスについて行きましょう。この人は「さあ行きなさい」と言われたのです。帰っていったというのではなくて、「道を進むイエスについて行った」と書いてあります。エリコからエルサレムに行く道を進む、十字架の苦しみ、死へと向かうイエス様に、この人はついて行きました。

2020年度が終わろうとしています。そして、2021年度が始まります。その先への歩みが始まります。コロナからのリスタート。いつ本当にリスタートになるかよく分かりません。どうリスタートしたらよいか、どこに向かって進めばよいか、それを考えます。今を担わなければならない、今この感染症の中、切り抜けていかなければならない、という状況があります。でも同時に、もっと長いスパンで、もっと広い視野で、もっと遠くを、もっと未来を見るべきものがある。神様が見せてくださるビジョンがあります。世の中が悪くなり、人の愛は冷えます。それでも、切り株のように残りの者がいます。私たちは微力であっても、キリストの光を燃やし続けます。いろんなことを後悔したり、また、新しいやり方にチャレンジしたりしながら、“見捨てない神がおられる”と信じる者として、命が許される限り、主の道を主と共に歩もうとするのです。そして、「こんな私たちだけど、イエス様と一緒に歩くのはやっぱり悪くないよ」って横を歩く人に、後に続く世代の人たちにそう言える torchbearer^{トーチ・ベアラー}の一人、ともしびを掲げる人のひとりに、共にならせさせていただきます。ここで、キリストの道を行くサーバントとサーバントリーダーが生み出され続けていくように、今持てるものを、今私にある自分の人生、自分の命を、それぞれが手を開いて捧げていきましょう。願いをイエス様に言えたらイエス様が言ってくださいます。「あなたは信仰によってもう救われています。さあ行きなさい」。

お祈りしましょう。

天の父なる神様。私たちの祈りを導き、私たちの行く道を導いてください。先が見えない中ですが、今何を大切に、誰を大切に、また、未来のために何をしたらよいか教え導いてください。イエス様が歩んだ道を同じように歩むことができますように。12弟子が後から歩むようになった道を、私たちも歩む者となることができますように。しもべとなり、仕える者となり、命を与える者として、この地上の命を最後まで生きることができるように導いてください。イエス様の近くにいらしてください。

主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。

*P4の「フリーグラー牧師」は、説教者が「ジグラー牧師」と言い間違えていました。訂正しました。